

高浜繁栄の道 を拓いた逸見昌経



木造 逸見駿河守昌経坐像 (園松寺蔵)

逸 見昌経は若狭武田氏の四奉行の1人であり、越前国との境を守る粟屋氏と同じく丹後国との境を守る役割を果たしていました。昌経は、文・武の将のどちらかといわれれば「武の将」のイメージが強いといえますが、本当はどうだったのでしょうか。

昌経は守護若狭武田氏に対して二度の反乱を起こし、「永禄4年の反乱」では本拠地であった碎導山城(大飯郡高浜町)が落城しています。その後、その武力の中心が海軍であったこともあり、永禄8(1565)

年、全国的に山城が主流であった中で、いち早く平山城、または海城ともいわれる高浜城を築城し、翌年には再び若狭武田氏に対して反乱を起こしています。

そんな「武の将」のイメージが強い逸見昌経ですが、実は「文」にも優れており、経済的な側面からも高浜の繁栄に寄与するなど、現在の高浜の礎を築いた人物ともいえます。

高浜町内に『市蛭子斎祭記録』という資料が残っています。高浜町内の本町区に鎮座する皇大神宮、恵比須神社の年数録です。この本町区という地域は丹後街道が地区の中央を

通っており、現在も商店が軒を連ねています。また町内を流れる子生川と海の交わる地点であったこともあり、昔から船の荷揚げ場でもあり、高浜地区の重要な物流拠点でもありました。

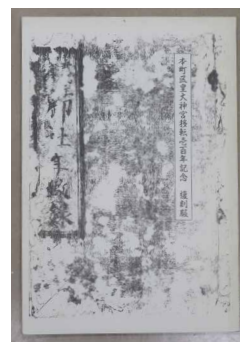
昌経がこの地を治めていた時期には、12軒の間屋が毎月六斎の日(8日、14日、15日、23日、29日、30日)に市をたて品物の売買が行われ、後には18軒にまで増えたと記録されています。市を行うためには昌経の許可が必要であり、昌経が早くから高浜の繁栄のためには経済の発展が重要と考え、そのために市をたてることを推奨していたことがうかがえます。

昌経が亡くなった天正9(1581)年3月26日以降、市は一旦途絶えました。慶長年中(1596)



めいきょうどう 明鏡洞

1615)に再開し、青郷村や内浦村、佐分里(佐分利)村から市へ出店するものもいました。その後、市は、大西町からの出火大類焼で売買が止まる享保12(1727)年まで続きました。



本町区皇大神宮移転
百年記念 復刻版
(写真提供：高浜町郷土資料館)

関連史料・ゆかりの地

皇大神宮

高浜七年祭の太刀振り



ことしろぬしのおおかみ おおくにぬしのおおかみ
始まりは南北朝時代といわれ、事代主大神と大國主大神が祀られています。「高浜七年祭」では、中ノ山の太刀振りが奉納されます。

【住所】大飯郡高浜町事代2-1 (JR若狭高浜駅より徒歩9分)

参考資料等

舘太正『本町区皇大神宮移転百年記念 復刻版』
高浜町郷土資料館編『平成12年度企画展図録「戦乱の高浜城主 逸見昌経展」』

執筆・協力

高浜町郷土資料館 主査 寺下 千代美